

巻頭言

一般社団法人日本私立獣医科大学協会の設立とその役割

一般社団法人日本私立獣医科大学協会会長 谷山 弘行

任意団体であった私立獣医科大学協会（私獣協）が、法人格を有する一般社団法人日本私立獣医科大学協会（法人私獣協）として新たに出発する事となった。すでに法人設立に必要な手続きはこの2015年2月に終了しているが、6月の私獣協総会で設立の承認が加盟校の代表者によってなされた。この法人化は前私獣協会長 池本卯典先生の優れた先見性とご決断によってその基礎が構築されたものである。新たな法人私獣協がこれまでの成果を基盤にして、さらなる発展と質の高い役割を担うべきであるという先生の強い思いが込められている。

機関誌「獣医学振興」もすでに4号が発行され、その内容は益々充実してきている。当時の会長であった酒井建夫先生は創刊号の巻頭言に、少子化を迎えた現代、大学は教育環境を整備充実させ、教育の質の向上を図らなければならない。特に私立大学においては、専門教育はもとより教養力や建学の精神を反映した人間力の育成も力を入れなければならないと述べられており、具体的に行動を起こすように促されている。教育研究体制の整備、モデル・コア・カリキュラムの策定と実施、分野別第三者評価の導入と実施、共用試験の導入と実施が具体的活動計画として公表された。これらはすでに実施され、あるいは実施の段階にあり、分野別第三者評価および共用試験は試行段階にある。さらに改革の目玉である参加型臨床実習の実施は待ったなしの状況にある。こうした自助努力は、最大の理解者である公益社団法人日本獣医師会の強力な後押しもあり、文部科学省や農林水産省の理解を引き出し、これまでに無い

情報や助言の提供を得るまでになっている。

一方で、世界水準を視野に入れた教育改革が求められている。政岡俊夫元私獣協会長は獣医学振興第2号の巻頭言に「我が国の獣医学教育改善考」を寄稿され、2004年に「One World, One Health」の思想が生まれた背景を紹介された。そして「この思想に獣医学教育機関が応え獣医学教育を継続するには、適切に対応できる教職員の育成及び確保、専門分野の研究活動や技術開発を進展させ、基礎獣医学、応用獣医学、臨床獣医学及び獣医公衆衛生分野の教育体制ならびに施設設備の充実に傾注して取り組む必要がある」と述べられている。これは「国際水準を目指す獣医学士課程教育の実行へ」（獣医学振興第3号、巻頭言）の決意に結びつく。すでに開始されているモデル・コア・カリキュラム教育、参加型臨床実習のための共用試験の実施、専門分野別第三者評価などの事業が計画通りに実行されているか、また、この計画を実施するための教育体制ならびに施設設備の充実が図られているか、そして想定された成果を生み出し得るか、を絶えずチェックしていく体制の構築が求められているのである。ここに法人化した私獣協が担うべき自己点検評価の役割があると考えられる。2000年、私獣協5大学は将来の国際水準を満たす獣医学教育の実行に向けての改革改善を行う事を決議した。その後、2015年まで8次に及ぶ「自己点検相互評価」を継続し、教育改善の道程を確かなものにして来たのである。この活動の延長線上に今日の姿があるが、さらなる努力が求められていることは周知の通りである。

獣医学振興第4号の巻頭言に「跳躍して一步を」と題して、池本卯典先生は、「複雑多様な現代社会において獣医師が担わなければならない役割は質、領域とも拡大を続けており、多くの獣医師がこれに従事し、多大な成果をあげている。しかし、それに応えている獣医師への社会の評価は決して十分とは言えないのが現状ではないか。これからの法人私獣協にあっては、刮目して現実を見つめ、過去の蓄積を尊重しながら建設的に意見を集約し、堅実に歩み続けたい。」とその決意を述べられている。新法人私獣協は、これまでの道程を確実なものにする為に、改革の目的、計画、実行、成果を常に反芻しながら次世代へと継承する責任を担っている。同時に、大学が多大の支援を受けて来た日本獣医師会との協力関係も欠かせない。両者は両輪のごとく連携を益々深めて行かなければならない関係にある。それは、日本獣医師会が大学における獣医学教育のフィード

バック機構としての大きな役割を担っているからである。本号には、両者の関係を揺るぎないものとする為に日本獣医師会副会長 酒井健夫先生に獣医学教育に対する御提言をお願いした。また、今後の教育改革に反映することを目的とし2つの特集を計画し掲載した。法人私獣協構成員への新たな提案に結びつく情報となればと願う。

新法人には、新たな組織として教育分野担当理事、研究分野担当理事、教育行政担当理事、渉外担当理事を置き、恒常的にこれからの課題について整理し、改善の目的、計画、実行を取り進めて行く組織として位置づけている。また、各種委員会を立ち上げ諸々の課題に対応する仕組みを構築することになっている。法人私獣協がこれからの世界水準を視野にいった獣医学教育の計画、実行に戦略的指導力を発揮できるかどうか、会員の創意工夫が求められる。